

'87新春座談会

北海道の森からの素晴らしい贈り物

「あさひかわ・木の家」を語る



出 席 者 (順不同)

- | | |
|---|--|
| ■ (社)旭川建築協会理事長
辰巳建設株式会社社長
辰 巳 忠 雄 さん | ■ 北海道林業経済新聞旭川支社長
市 川 好 彦 さん |
| ■ 旭川地方木材協会理事
北海道木質材料需要拡大協議会委員
竹内木材工業合資会社社長
竹 内 久 弥 さん | ■ 上川支庁林務課林産係長
谷 内 山 留 太 郎 さん |
| ■ 旭川市建築指導課建築審査第2係長
石 川 吉 博 さん | ■ 旭川医科大学小児科医局医師 伊藤真也氏夫人
伊 藤 千 賀 子 さん |
| | ■ 司会 林産試験場副場長
盛 功 さん |

木材産業が不況といわれ数年たちました。いまだ明るい見通しはなかなかでできません。

何と言っても木材の最大の需要先は住宅部門です。その住宅における木材使用率も年々低下してきています。

一般に潜在的な木に対する

あこがれ、愛着はあると

思うのですが、その消費者

の潜在需要を木材側は掘り

おこす、顕在化する、ある

いは需用の創造といった努

力を怠ってきたとも考えら

れます。

そういう意味で、実際

に木を多用した家を建てて

一般に公開することは消費

者に対し大きなPR効果を

持つことになるはずです。

一昨年の札幌に引き続き

旭川でも「木の家」が建てられました。そこでウッディエイジ

では新春特別企画として「あさひかわ・木の家」を巡る話題

について、この木造住宅モデル展示事業にかかわってきた方

々にお話をいただきました。

。「あさひかわ・木の家」が建つまでは

司 会：旭川で旭川地方木材協会（以下旭川木

協）が中心となって、木材需要拡大のために「木

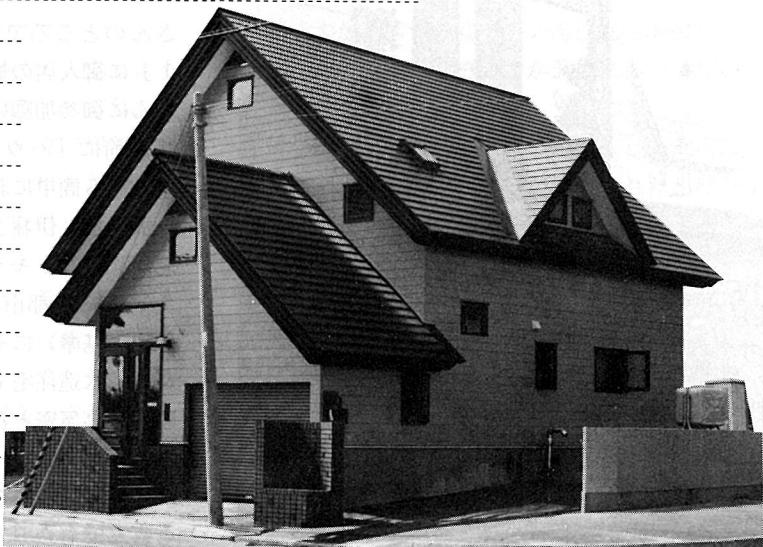
の家」を建設し、PRに努めてこられました。ま

ず建設に至るまでの経緯について同協会理事の竹

内さんに口火を切っていただきたいと思います。

竹 内：道から北海道木材協会に対して旭川でも札幌のような「木の家」をやってもらいたいという話がありました。

私も道の木質材料需要拡大協議会のメンバーですから、札幌の「木の家—北国ハウス」を何回も見学してきました。あのモデルハウスをみると木材屋としては木をたくさん使ってもらっていてう



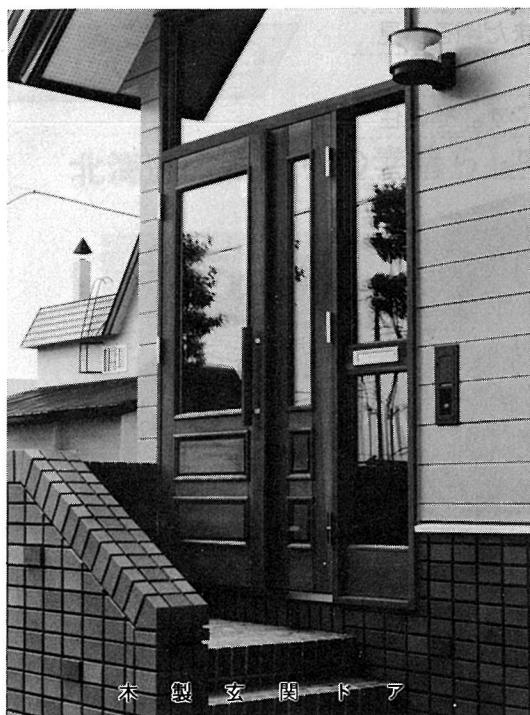
「あさひかわ・木の家」外観

れしいのですが、木の塊のような家で、はたして売れるのかという疑問が生じました。

そこで私が申し上げたことは、札幌と同じようなものではなく、旭川木協に全面的に任せてくれるならば、また旭川の特徴が出せるものならばということで引き受けた次第です。

それが昨年の4月のことでした。上川支庁の方とも相談し、設計施工については旭川建築協会に、また林産試験場、旭川市にも計画に参加してもらいスタートしたというのが経過でした。

谷内山：展示のみではなく販売するということが前提ですので、建設する場所や土地の選定から始めました。市の振興公社（旭川市出資の土地取



り扱い機関)にあたったところ、そういう公共性の高いものならということで、売れなくても1年間は無償で土地を貸してくれると言ってくれました。

司会：そもそも、旭川木協と旭川建築協会とのつながりは、どのあたりから出てきたのですか。

辰巳：昭和60年11月ころ道北3支庁（上川、

留萌、宗谷）の林産行政懇談会があり、製材業者が集まってこれから木材需要拡大の方策を話し合う場に、建築協会の方へオブザーバーとして出席願いたいというお誘い

が谷内山さんからあり、それからのおつきあいです。

谷内山：ええ、これからは製材業界だけで木材需要拡大はできない、関連する業種とのタイアップを図らねばならないという観点から建築協会にお願いしました。



。「ハウス旭川PART1」の住み心地

司会：もしこの座談会までに「木の家」の入居者が決まつていればその方にも御出席をお願いする予定でしたが、現在良い嫁ぎ先を選定中のことです。それで、「木の家」を施工された辰巳さんのところで建てられた「ハウス旭川PART1」に御入居の旭川医大小児科医の伊藤さんの奥さんに御参加願いました。伊藤さんにお話しいただく前に「ハウス旭川PART1」について辰巳さんから簡単に説明していただけませんか。

辰巳：伊藤さんに買っていただいた「ハウス旭川PART1モデル住宅」、これは旭川市がウイントピア都市を目指すHOPE計画（北欧型寒地住宅基準）にそって建てられたモデル住宅で、これも木造住宅です。「木の家」同様の構造、高断熱・高気密となっています。窓には木製サッシを使い、ソーラーでお湯を沸かし、全室床暖房で多少コスト高になっていますが伊藤さんにはとても喜んでもらっています。

司会：伊藤さんはまだお若いようですが御家族の構成からお聞かせください。

伊藤：主人と私、それと4才の男の子と2才の女の子の4人家族です。

司会：最近の時代は感性の時代、ソフトの時代で、特に住宅に関しては男から女の時代と言われているように、家を建てるにあたって女性の発言力が非常に強くなっています。PART1の家を見ての伊藤さんの印象はどうでした。



伊藤：私達が家に求めていたのは、格好の良い家でなくてもいいから土台のしっかりした家であること、またゆったりくつろげる家であること、それから木に魅せられるところがあったので、あの家を見て、また、辰巳さんのお話を聞いてとってもすてきだと思いました。木製サッシは見た感じが暖かみのある、落ちついた雰囲気を持っていてとても印象に残りました。しかし、旭川に永住するとも限りません

し、引っ越すことになるかもしないわけですから。主人はすぐに気に入っていたのですが、背広の後ろを引っ張っていたような状況でした。二人でじっくり相談した結果、たとえ旭川を離れることになっても、あの家ならばきっと売れる家だから、買おうということになったのです。

司会：そうですか。実は伊藤さんと同じような発言をごく最近、ある講演会で耳にしました。先日、北海道建築指導センターの創立20周年記念事業として、「フォーラム北の住まいと暮らし」が開催されました。そのなかで、女性パネラーのかたが発言していたことですが、アメリカの人が家を求めるにあたっての選定基準の第一は、いま伊藤さんが言われたように次に転売可能かということだそうです。彼等は家族構成が変わり、あるいは家に対する考えが変わった場合に家を改造するとかではなく、住み替えることを考えるようなんです。したがって新築のときはきらびやかでなくとも、年を経るごとに、また、住み手が変わるごとに、その家らしい魅力を増す住宅であって欲しいと言っていたのを聞いていたものですから、伊藤さんからその話をうかがって驚きました。

伊藤：今後、旭川を離れることができ十分予想されますので、主人にはもうちょっと考えましょうといった訳です。冷静になってじっくり話あったのですが、あの家ならばきっと財産として自分達が持ていられるものだし、売ろうと思ったらきっと売れるだろう。無謀な買い物ではないという結論になったのです。今実際に入居して見て、その考えは間違っていなかったと思うし、こんな良い家ならば売りたくないというのが実感です。

司会：御主人の、または奥さんのお友達がお宅にいらっしゃった時、どのような質問が多いですか。

伊藤：間取りもそうですが、暖かいかどうかを聞かれます。主婦としては燃料代が幾らかかるか気にかかるところですから。それからソーラーでお湯が沸くと言うとうらやましがれます。

最近、大分寒くなってきたが、木製サッシが曇るということはないですね。前の家はごく普

通の住宅でしたから、室温が30度あっても足元がスースーしていて何か寒いなと感じましたが、今の家では子供が開けっ放しで走り回っても、どこでも室温が22~23度と一定ですから暖かいですね。

考えてみれば、夏でも25度あれば暑いと感じるはずですから、このぐらいの温度なら充分生活できると思いますし、その方が健康に良いと思います。

司会：入居されてからしばらくして近所にこの「あさひかわ・木の家」が建てられたわけですが見学に行かれましたか。それとも辰巳さんの熱の入れようが違うようだし、もし「あさひかわ・木の家」の方が立派だったらシャクだから見に行かなかったとか………(笑い)。

伊藤：建ちあがってから見せてもらいましたが、大分私の所とは感じが違います。「あさひかわ・木の家」のほうがたくさん木材が使われているという感じです。

・「あさひかわ・木の家」のセールスポイント

司会：札幌の「木の家」の方は、竹内さんも言っていたように木だけの家と言う感もありました。札幌の場合はできるだけ木を使った家を建ててみて、見学者にその中から取捨選択をしてもらおうという趣旨のモデルハウスであったので、あれで良かったのでしょう。「あさひかわ・木の家」の場合には2カ月後には人が住む、建てる方としては売る家であるわけですから、木の使い方としては苦心されたところがあるのではないかでしょうか。

辰巳：おそるおそる木を使ったというところです。木を使いすぎてくどいと言われない程度に使ったつもりです。本当はもうちょっと使いたかったところもあるのですが、コストアップにもなるし………。

私、ハウス旭川PART1, PART2, その他多くの建売りあるいは注文住宅を造って来ました。そして住まわれた人から、なかにはお客様の認識不足と思われるものもありましたが、多くの貴重な御意見をいただきました。

小さいお子さんのいる家では冬に雪をいっぱいつけて帰ってきます。このような時、玄関に靴やジャンパーをぬぎっぱなしにしても、そこで乾いてしまうような工夫があればいいという意見があったので、さっそく「あさひかわ・木の家」には玄関に床暖房を設置し、他の居室より2度高めの温度を設定しました。その結果、玄関から居間に冷たい空気が入ることもなくなり快適性が増すことになります。こういうアイディアは実際に住んでいる人の御意見からでできます。

また「あさひかわ・木の家」の2カ月間の展示期間中は報道機関のお世話にもなり、3000人を超える多くの方々に見ていただきました。また、1600人のアンケート調査の回答が寄せられました。天井の吹き抜けにしても、床を張って物置にしたほうが良いのではないかという意見もありました。年代層別でみると、50代では吹き抜けは大嫌いだけど30才前後では大好きと言っています。また、外壁についても同じようなことが言えます。建てる方としては、年代に応じたきめ細やかな設計が必要だとつくづく感じました。

まだ売れていないからPRをするわけではありませんが、あの「木の家」の外壁の色は、多くの人から意見をもらい一般受けするというものを塗りました。購入される方が——ただしあの家を本当に愛してくれる人に買ってもらいたいですが——、希望されるなら好みの色に塗り替えます。その方が外壁の保護になって良いですから。また、ボイラーの設置場所についても地下室に置き、燃焼時の騒音をできるだけ低減するようにしました。

・適材適所に木を用いよう

竹内：先ほどお話をあったように、何が何でも木を使うことは適当ではないと思います。たとえば壁材に木を使うのは場所によっては良いかもしれません。わたしが



泊ったスイスの一流ホテルの壁面にはすべて木が張っていましたが、それは素晴らしいものでした。しかし、またクロス張りなどにしてもある意味では良いものだと思います。2~3年たって汚れれば張り替えれば良いですから。それもかなり安くできます。

日本の住宅で壁全体に木を張ってある部屋を見てそれが良いと言う人は、10人に2~3人程度ではないかと思います。このような消費者の感覚を無視した木造住宅は、かえって消費者の木離れをおこしてしまうことになると思います。

他の建築資材との調和を図りながら、消費者の求めるちょっとした趣向から木材需要拡大の道を求めて行く必要があると思います。ちょっと話が違いますが本州では良い家というのは木ばかりでは造っていないはずです。

また、北海道のこれから暖房は床暖房になっていくでしょう。そうした場合に床にフローリングを張るのでは効率が悪い。木造住宅だから、何が何でも木を使えなどとは言えません。フローリングや壁材に木を張るのはオフィス、学校、体育館のようなところへ需要拡大の道を求めればよいのです。

辰巳さんが言っていたように、皆さん的好む木造住宅を大いに研究させてもらって、そのなかにいかに木を少しづつでも使っていってもらえるかというところに最大の焦点を当てていかなければならぬと感じています。

そんななかで集成材は伸びていくような気がし



ます。あの「木の家」でも階段回りの柱に集成材を使っていましたが、なかなか良かったと思います。

それから木材需要拡大協議会では昨年5,000万円かけてTV報道等で、また林産試験場でもいろいろ刊行物を通じて木の良さをPRされていますが、構造材に木はとても素性の良い素材ですね。軽くて丈夫、湿度調節、断熱効果、健康にも良いはずです。日本人の奥さんが長生きをするのは木造住宅に長く居るからじゃないでしょうか（笑い）。

旭川では公庫融資第一回目の木造住宅の建て替え時期に来ています。それらの家はみんなとは言いませんが、傾いたり、土台を取りかえたり、断熱などされていないために寒かったりと、今度建て替えるならば木造はもういやだなんて思っているんですね。木造住宅の悪いイメージを一掃するためにも「木の家」は貢献できると確信しています。

・住まいは住み方から

司会：石川さん、「ハウス旭川PART 1, PART 2」それから「あさひかわ・木の家」へとかかわりあって、建築家と言う立場から「あさひかわ・木の家」に至るまでの感慨もあろうかと思います。また、欧米の住宅事情にも詳しくいらっしゃるのでそこらへんからお聞かせ下さい。

石川：北海道と言っても東西南北、気温降水量等気候がかなり違い、「あさひかわ・木の家」においても札幌の物真似ではいけない訳です。



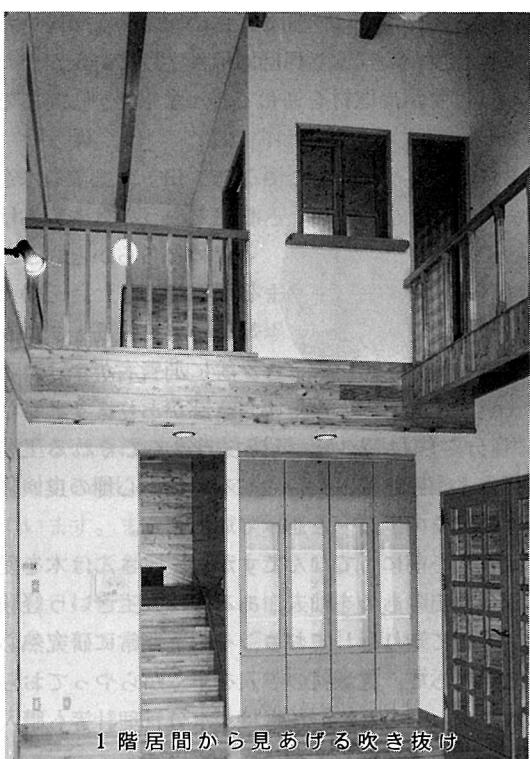
物真似といえば北海道の家というのは、本州の家をそのままもってきたものです。本州は高温多湿ですから、通風を図りながら大事に木を使ってきました。北海道は非常に寒い、だから断熱材をその家にただ着せた。その結果どういうことになるかといえば結露、腐れが起きるわけです。

旭川が始まって96年たち、21世紀を迎えるにあたりどんな家が良いのか、木を使うならどんな使い方をしなければならないか、旭川の気候風土に合った工法も求めて行かなければならないですね。

先ほどからアメリカの話がでていましたが、彼らは住宅そのものに対する財産価値を高く認めています。何年かに一回必ず手を入れるし、彼らは合理主義ですから子供が2人の時代と3人の時代とではうまく住み分けています。ですから、売れる家でなければならない訳です。

それから価値の問題ですが、住宅における価値は何も一戸の家そのものについてのみではありません。彼ら欧米人はどちらかといえば個人主義の強い国民たちです。しかし家、町並み、景観についての規制についてはだれも文句を言いません。つまり町並みとか景観を価値と認めているのです。

日本でもそこのあたりの意識作りから始めていかないと、本当に価値ある住まい作りはできないと思います。行政も建築家も住む人々も考えてい



1階居間から見あげる吹き抜け

かなければならぬ時期に入っていると思います。

こういったことを考慮しながら計画を進めていったのが、「ハウス旭川PART 1, PART 2」、そして「あさひかわ・木の家」でした。断熱基準でいえば北欧・カナダBランク以上、木製サッシを使用すること、地場産業の活用、町並みの景観を整える意味で屋根の形状、外壁の色の調和にまで口をはさむ等々無理なお願いを重ねて来ました。

まだまだ住宅で考え直さなければならぬことがたくさんあると思います。今まで住んでいた家よりより暖かい家をというけれど、最も快適な暖かさはどの程度なのかを我々はあまり考えません。これは子供のうちから副読本を作るなりして、北国旭川に根ざした住み方という社会教育を含めて検討する時期に来ていると思います。

・木材需要拡大への道

司会：今回の「あさひかわ・木の家」は民間活力がもろに出て、さらに地域と一体となって大成功した事例だと、道では高く評価しています。市川さん、お宅の新聞で「木の家」の記事をいろんな角度から何回も何回も取り上げていただいたわけですが、取材を通じてどんな感想をお持ちですか。

市川：今までの木造住宅というのは安くあげるためにどちらかというと雑な作りでした。そのため嫌われ、鉄筋・ブロック等に消費者が走ったと言う感があります。もし

“自分が住む”という気持ちで建ててくれる工務店さんがいれば、長持ちする、住み心地の良い住宅になるのになーと思っていました。

本人を前にしてなんですが、辰巳さんは木を愛し、木そのものを専門家、あるいは大工という経験を通して知り尽しており、その上非常に研究熱心でいらっしゃる、乾燥材の導入を早くからやっておられます。そのために乾燥機、水分管理計等も購入して厳重な品質管理をなさっています。



窓には木製サッシ使用（居間）

それから、「あさひかわ・木の家」の施工現場にも何度か行きましたが、材料の吟味などもご自分で確かめ、悪い材はどんどん良いものに替えて行く、納得のいくものを使う、こういう工務店さんばかりなら木造住宅も安心だと思いつながら見ていました。

安くなければ木造住宅は普及しない、需要拡大につながらないという意見もありますが、本物のものを使うということも大切だと思います。「木の家」では耐久性を高めるため柱も太くする、厚みのあるものを使う、プリントは使わない等、多少高くなても良いものを実際に建て、それを見学したり、住む人が木造住宅の良さを認識するような形にしていかないと、木材需要拡大にはつながらないのではないかと思います。

谷内山：木材需要拡大のPR活動はそれをしてからといって、すぐに具体的な効果が出てくるものではありませんね。北海道木材協会が木質材料のPRとして、「木の家」を札幌、旭川と建て、予定では、帯広、北見、函館へとつなげていきたいとのことですが、しかしそのみかえりは数字の上では分かりません。ですからよほどの踏ん切りがないとPR事業はできないと思います。

長持ちのする良い木造住宅を建てる、そこで成長していく子供が家を建てる時に、自分の住んでいたような良い木造住宅なら建てようという気持ちになる、そして子から孫へと木造住宅の伝統が受け継がれる、そんな遠大な計画のもとに地道な需要拡大活動をしていかなければならないのかとも感じているところです。

。林産試験場に期待すること

司会：林産試験場はこの度大引越しを終えましていよいよ2月5日に落成式の運びになりました。関係者の方々には本当にお世話になりました。

そこで、新生林産試験場に対しこんなことをしてもらいたいというご意見、ご要望がありましたらお聞かせ願えませんか。

市川：林産試験場に要望というよりはそれを活用する企業の方々に対してなんですが、試験場を活用する企業は何かうまい話はころがっていないんだろうかというような受身の立場ではなく、今自分達の企業が抱えている問題はこれこれで、それを解決するためにはどんなアプローチをしなければならないかといった能動的な、あるいは目的意識をもった使い方をしないと、試験場さんも困るのではないかと思います。我々が、試験場を育っていくといったら試験場さんには申しわけないかも知れませんが、そういう企業と研究機関とのやりとりは大切な事だと思います。

竹内：我々は木とつきあって随分になりますが、意外と木について知らないことがあるんです。よく、丸太ころがしで儲けていると悪口をたたかれますが、確かにそんなところがありました。しかし、これからはそんなことばかりしていられません。外材の問題、新製品開発、需要拡大等、林産試験場をどんどん利用していかなければならぬし、試験場を中心として木材業界も生きていかなければならぬ時代に来ていると思います。業界、行政、試験場が一体となった生き残り戦略を展開していかなければなりません。

比較的最近の林産試験場の開発製品であるLVLについては、なかなか企業化もうまくいっていないようですが、私個人としては、あのLVLというのは建築資材として良いものだと思います。机の天板とか家具のようなこまごましたものも結構ですが、たとえば、床にLVLを薄く突いたものを張る、すると継ぎ目のない床材になる、一見大理石のような雰囲気になる、しかも暖かみがある。素材としては素晴らしいものなので、建材サイドなんかと用途開発をじっくりやっていってもらいたいと思います。

司会：技術が開発されたら用途開発は異業種ともやっていくことが大切なんでしょうね。

竹内：建築用いられなかつたら木質の新製品は企業化が難しいのではないですか。製材は無論、家具業界も建築を抜きにして成り立ちません。家具屋も建築家も手前ペースで需要拡大を図るのは適切ではないと思います。

司会：竹内さんの分野でもある「木の家具」と「木の家」の関連なども皆さんにお聞きしたかったのですが時間が来たようです。

ところで、伊藤さんは、林産試験場のことを今まで御存じでしたか。

伊藤：いいえ、名前は存じ上げていましたが、実際なにをしている所かというと良く知りませんでしたし、あまり知ろうとも思っていませんでした。

司会：いや、それがまだまだ一般的な意見なんでしょうね。林産試験場では昨年一般市民を対象にした、木を知ってもらおうという公開講座を行いました。また母親とお子さん向けにトンカチ教室なども行い、できるだけ木の良さ、性質、木に対する親しみを持ってもらおうという活動を行っています。また、新試験場でも一般場内公開を行いますので是非おいでください。

今日は皆さん本当に忙しいところ御出席いただきましてありがとうございました。

(文責 石河周平)